

石津純道先生を偲ぶ

甲 詞

谷 是

謹んで石津純道先生の御霊みたまに申し上げます。先生が旧姓高知高校に赴任されたのは、昭和二十一年二月のことでありました。高知市は空襲で焼け野が原となり、瓦礫がれきの固まりと化していました。高知が、焼け跡をたどりながら、学校へ着いたとき、その校舎とてなく、ただ暗澹とした気持であったと、後年うかがったことがあります。まず。その日から教官や生徒達と一緒に、丸太やモッコを運び、校舎の建築から始められたのであります。以来、在高二十七年の永きにわたり、旧姓高知高校、高知大学教授として、営々高知の学生に国文学を講ぜられたのでありますから、いかに土佐を愛されたかの証左でありましょう。それは先生が、土佐に国文学の種を蒔き、大学にその学風を確立したいという、強い責任感を持ち

続けられたということに違いありません。学生騒動いまだ盛んなる時には、文理学部長として、その粘りと根気で学生と対話を重ねられ、その温厚なるお人柄で、大きな事件もなく、その責を果たされたということを、他の先生方よりうかがったことがあります。

先生が提案されて発足した「高知大学国語国文学会」は、地味な研究発表の会ですが、今日まで継続し、その会報も今日二十六回(当時)を数えるに至りました。これはこの道に対する先生の熱い憶いの発露の結果であると信じます。また、高知での教え見は、相当数にのぼり、国語の教師、行政官庁、民間企業、マスコミ関係など、あらゆる分野で活躍しています。中には大学教授や学校の管理職として、また各種の図書館長など、地域の文化界の中核的存在として活躍している人々も多く、先生の蒔かれた種

は、今日各地に拡がり、花を咲かせ、実を結んでいると言っても過言ではありません。

先生の学問は、中世文学がご専門で、平家物語や日記、随筆文学、中でも歌論などは自己の分野とされましたが、近代文学では夏目漱石、島崎藤村なども手がけられ、幅の広い学域を持つておられました。それは字句の解釈や説明にとどまらず、その文学の根底にある、精神基盤の領域まで言及され、文学、芸術、宗教、美学といった分野にまで掘り下げるといふもので、真、善、美、空、白といった美的理念を差し示し、人間いかに生きるべきかという、日本や東洋の“人と自然”も、語り尽くされるといふものでありました。例えば心敬、世阿弥、禅竹などの芸術論は「道と幽玄」として、その著『中世の文学と芸道』に凝縮されており、さすが、さらに近世の芭蕉などについても、中世的系譜をひく文学者としてとらえられ、その中に“芸術道”とも言うべき“一つの道の思想や意識”を持つものだと説かれるのでありました。先生の学風は、表面的な知識や分析の集積ではなく、文芸学的な文学の根底を語られたもので、人間道としての在るべき姿を、奥深く探り示すことを主眼とされておりました。もう、このような講義をなさる先生は、今日では少ないのではないかと、私も教え児の間で、時として交わされる言葉であります。

石津先生、先生は、私ども教え児に、大きな感化と、生き方を教えて下さいました。その醇々として語られる語り口、講義の構成と展開の妙は、その温容なる風貌と共に、私どもにとつては、終生忘れるものではありません。しかし、悲しいかな、その思い出を私どもに残されて、今、黄泉の国に旅立たれようとされています。

石津先生、今はただ、お別れをするのみです。どうぞ、安らかに眠り下さい。思い溢れて、言語が整いませんが、先生との別れの言葉とさせていただきます。

平成八年十一月二十六日 高知大学教え児代表

谷 是(ただし)

*右は平成八年十一月二十六日、午前十一時、静岡県駿東郡清水町長沢の沼津愛昇殿の告別式にうかがったとき、式の直前に遺子純一氏からのお申し出があり、原稿無しで、その場で、私の頭にある字句そのまま弔詞を申し上げます。従って全く同じ文章ではないと思いますが、右の主旨の弔詞をささげたつもりです。ここに再生したものであることを、おことわりをしておきます。

(第十一回卒業生)

一枚の写真

漆原直道

ここに一枚の写真があります。石津、松村の両先生を中心に、国文関係の六人の先生方が机を前に腰かけておられ、その後ろに私たち一回生の他二回生の方など六人がすました顔で立っています。一回生はいかにも秀才らしい故永田哲夫兄、何となく文士の風貌を思わせる桜内作平兄、まじめなだけがとりえのような顔の私の三人でした。

新制大学発足当時の国文科は先生一人对学生一人という、今から考えるとぜいたくこの上ない陣容でした。焼けあとの粗末な校舎、先生方お一人お一人の研究室もなかったようで、一部屋を本棚数個で仕切りをし、片方のやや広めのスペースが先生方のお部屋、反対側が学生の研究室というか、たまり場でした。外見的には貧しいものでしたが、精神的には豊かな雰囲気だったように思います。

先生方お一人お一人の目が学生一人一人に充分すぎるほど行きわたり、学問のご指導はもとより、日常の学生生活全般にわたり何かとご面倒を見て頂きました。卒業を控えた就職活動の際など、石津先生には毛筆の履歴書のお手本を書いて頂いたものです。今こうして思いを学生時代にめぐらしますと、様々な光景がよみがえりますが、中でも石津先生ご担当の、三年次の「国文学

演習」で新古今を勉強した時のことが懐かしく思い出されます。

昭和二十六年、まだく戦後の物不足で参考書などもあまりなく、古本屋をたずね廻り博文館発行の鴻巣盛広著『新古今和歌集遠鏡』を買い求めました。裏表紙に一五〇円の値札がついていて、貧乏学生の私にはかなりの出費だったことを思い出しますが、単行本のずつしりとした重みが、私に大学生を実感させてくれました。

授業では毎回数首の和歌を四、五名の受講生で分担し発表しました。今でいうアルバイトに追われ、勉強不足の私は発表の度におずおずと不十分な準備のまま授業にのぞみましたが、先生には厳しい中にも暖かいご指導を賜わり、緊張と同時に充実感を味わったものです。

先生が大学をご退職になられ、昭和女子大学に赴任なさったあと、昭和五十一年頃と思いますが、初秋のある一日先生の新しいお宅にお邪魔いたしました。久しぶりに先生ご夫妻にお目にかかり、私の東京での教員生活などご報告旁々色々お話を伺いました。お庭に月下美人の鉢があり、夜純白の花が咲き、芳香があたりに漂ったというお話をお聞きした時、まだ月下美人なるものを見たことなかった私は、先生の嬉しそうに話されるお顔から、さぞかし美しい花、夜半ほんの短い時間の命というその花に、美の宿命のようなものを感じ、想像をふくらませたことでした。

先生の穏やかなお人柄の中にかくされた凛としたご気性、お口の髭にご造詣の深かった漱石の面影を垣間見るようなお顔など、つい昨日のことにように思い出されます。

先生、改めて心からご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

(第一回卒業生)

石津純道先生のこと

松岡甫明

平成八年、年の瀬もおしつまつた頃、私は同期の退職者の会「三三三」に出席していた。その席で戸梶博介氏から石津先生の訃報をおききし、一瞬言葉を失った。あれはたしか、十二月七日土曜日のことだったと思う。

私が石津先生にお目にかかったのは、高知大に入学して間もなく、補導主任の先生を決めなければならなくなり、先輩の助言で石津先生にお願いすることになった。同郷の小野義三君も同行し小津校舎の一面にある官舎にお伺いした。案内を乞うとご子息の純一さんが出られた。当時土佐高の二年生だったと思う。礼儀正しさと聡明さが立ちふるまいに出ていて、義三君と感心したことであった。先生は私たちの願いを快く受けて下さった。それから

四年間、いや卒業後も何かとお世話になることとなった。

私が入学した昭和二六年頃は高知大も新制大学として出発したばかりのものであったが、小津校舎にはまだ旧制高校の雰囲気だどことなく漂っており、ことに伝統のある南溟寮に住居することになった私には至極好ましいものを全てに感じていた。

当時の世相を顧みると、概して貧しく、全体として極めて質素であったように思う。粗衣粗食を常としていたように思う。だから、遊ぶなどという術もなく、金もないので、暇が出れば図書館へ行って、本を読むか、寮でごろ寝という生活をくりかえしていた。

一般教育の二年間、私はまだどの学科に進むかを決めかねていた。郷里の先輩土居伝氏(事務長)は「経済か法科をやれ」とすすめてくれたが、私は石津先生のおられる国文科に進んだ。先生の講義をおききして自然にそうなったのだと今でも思う。一般教養科目では「人間形成としての文学」をお聴きし、漱石の研究に興味を覚えた。先生が読まれている本なら何んでも読んでみようとなんかことを考えていた。

また、私は生活面ではかなり貧しい生活をしていたので、奨学金とか授業料の免除など申請することが多かった。その都度先生は適切に処理して下さいました。おかげをもって、私は四年間で卒業を迎えることができた。

昭和三十年春、私は教員を志し、幡多郡柏島中学校に赴任した。三十年は朝鮮戦争後の大不況で、まれにみる就職難であった。赴任して間もなく、先生からお手紙をいただいた。その中に

「君が高知に来る気があるなら推薦する所があるから考えてみなさい」というお言葉があった。大いに悩んだが、母独りを残すこともできず、おことわりしてしまった。在学中はもちろん、卒業してもなお不肖の教え子の行末を案じて下さった先生のお気持ち pensando、以後忘恩の徒に等しい歲月を送ったことを大いに悔いるしだいである。

余談になるが私には娘が二人いて、それぞれ東京と藤沢に住んでいる。このたび上京の機会があったので、先生ご夫妻が晩年を送られている静岡県の下土狩をおたずねすることにした。一周忌も間近い十月十八日、秋晴れの中、お伺いした。おで迎えを受けた奥様はお元氣のご様子、まずは先生の御霊前にお参りした。驚いたことにお住いのたずまいが、何んと高知の官舎によく似ていではないか。何うと、やはり先生の意匠によるものとのことであった。二階の書斎からは霊峰富士が見え、これも先生お気に入りの一つであったとか。当地は先生最初の赴任地、葦山中、三島中が在り、かつての教え子諸氏が今や名士となられ、先生を敬愛し、後援されていると伺い、わが身の至らざるを恥じると共に、はじめて安堵の思いがしたしだいである。

一心からご冥福をお祈り申し上げます。
合掌

端正にして温雅

山形鳩彦

石津先生を偲ぶには、私など、とりわけてよく師事したという者ではなかった。いわば不肖の弟子のたぐい、である。

小津の学舎の国文研究室は正門を入って玄関わきにあった。旧制高校の焼跡の面影の残る校庭を、官舎の方から先生がやって来られる。端正な国文学者の風貌がそこにあり、物腰また温雅である。

その時分の研究室は、教官も学生も「相部屋」だった。丈の高い書棚が間仕切りをなしていて、奥まった側に先生方の机の区画、片方が小講義室とか学生たちの居場所に充てられる、という按配である。

大方において先生方は私たちにも丁重、穏やかだったが、一度だけ石津先生の教室で、その毅然とした厳しさを実見したことがある。不謹慎な学生の態度を戒められたのだが、教室の空気は一瞬張りつめ、然るのち先生は平生の調子で、かの漱石を講じ続け

(第三回卒業生)

られた。

私は入学すぐに先輩方に付いて大学新聞会を手伝ったり、さらに新時流の学外サークルに加わったりしていたが、そのうちに卒業論文、就職の関門が迫ってくる。私の卒業論文は石津先生が指導教授になられた。それなのに我ながら愚かな気後れがあつて、格別の相談や教示を乞うのを怠つてしまった。結果、土壇場の手続きでとんだしくじりをやらしたのである。ともかくも無事に済んだのは、関係諸教授や石津先生の、酸いも甘いも——というご見解（自分ではそう思い込んでいる）の賜であつた。

こんな私がここで石津先生の追悼うんぬんなどは、実におこがましい話に違いない。それをあえて——というのは、退官して高知を去られていた先生のお宅に、ぶつつけ参上した折の情景が忘れ難いからである。

言われるところの「富士の見える萩素の里」。タクシーが近づくとき、小雨の中を傘を手に道わきに立つておられる先生を見た。恐縮する私に、先生はまず塀のツタからハマユウ、トサミズキなど土佐よすがの庭のたたずまいを懐かしげに説明されるのだ。

応接間には教え子作の旧南溟寮の風景画が架かり、晴れば富士山が額縁に浮かぶように眺められる、という書斎の窓に向かつて「建てるときはここまで考えてなかつたんですがね」と愉快がられた。新幹線通勤の昭和女子大のことや高知の思い出など、あ

れこれと伺ううちに、おいとまの時がきた。

ところが先生は自ら三鳥駅まで送つて下さるといふ。ホームで「こだま」のドアが閉まる際、ひよいと帽子をとつてにこやかに会釈された先生のお姿、瞬間こみあげてきた感情は、ずつと心の底に消えないでいる。

高知大学で先生が住まわれていた官舎のあたりは、いまは附属小学校の校庭になつており、この秋も運動会の歓声が弾けていた。

（第五回卒業生）

石津流「・・・」

横山和雄

（その二）

確か私が二回生の時の一般教養の講義であつたと思うので、昭和二十九年度の話である。季節は全く想い出せないが、夜の短い頃ではなかつたらうか。というのも、朝からの講義で石津先生が開口一番、

「夜明けを告げるにわたりの声がネ・・・」と目をしばたかれたのである。

夜遅くまでの御研究のため、更に短くなった睡眠時間を、早晩

のにわたりの声で削り取られた先生のお気持ちだが、「……」に
浸み出たのを痛感したことを、つい昨日の出来事のように鮮やかに
思い出す。

ところで私は今まで、このにわとりは先生の近所で飼われてい
たものだとばかり思っていたが、最近になって先生のお人柄を偲
ぶにつけ、さてよ、このにわとりは御自宅で飼われていて、
「……」は御近所への迷惑をおもんばかりの先生の御心労の一端
ではなかったかと思ひ直す次第である。

(その二)

三回生になったばかりの頃で、研究室に入内りすることが多く
なった。昇降口から近いこともあり、私は下駄ばきのまま研究室
へ入ろうとして、石津先生に見付かってしまった。先生は私の頭
を撫で、私の目を覗き込んで、「……」と無言のまま去られた。
これはひどく応えた。

実は二回生の時、松村先生に見付かってどなられた場合は、
「ドウモスイマセン」で済んでいたのである。

恐れ入って素足で石津先生の部屋へ行き、詫びを入れた。先生
は再び頭を撫で「……」。

後日高校の教壇に立つことになった私は、石津先生の「……」
の教えを使用させていただいた。この石津流「……」は、使い

方によって、百言の説教やとなりつけ雷よりも、ずっと効果を挙
げることが多々あった。

石津先生！「……」。

(第五回卒業生)

石津純道先生を偲びて

前田寛

学生生活をおくった小津町の文理学部 校舎も今は跡形もな
く、青春を謳歌した国文研究室での懐かしい談笑が、遠くの漁火
を眺めるように脳裏に明滅して、一抹の寂しさを禁じ得ません。

思えば、石津先生の御尊顔を拝し、強烈な印象を受けた最初の
出会いは、夏目漱石の「則天去私」の講義でありました。滔々と
語られる清澄なお声や柔和な眼差、鋭い人生観照と深い思索の中
に強心を引かれ、我を忘れて聞き入ったことが、まるで昨今の
ように鮮明に思い出されます。

研究室にて身近に先生に接する機会も多くなり、特大の角火鉢
を囲んでの先輩や同輩達との青臭い文学談、煙草の回し飲みなど
する日々に、先生が傍を通られると、思わず姿勢を正し、尊敬さ
に満ちた雰囲気を感じたのは、私一人だけではなかった気が致
します。しかし、父親の様な慈愛に満ち溢れた眼差に接すると、

一瞬のうちにその緊張は氷解し、暖かいものが心の隅々にまで広がり、心穏やかになった気がする常日頃でありました。

卒業論文の御指導を仰ぎに質素な大学官舎にお伺いした時、くつろいだ着物姿で「まあお上りなさい。」と招き入れられるをこれ幸いと上り込み、無駄に時間を費やす御迷惑をも顧みず、手前勝手に滑稽な失敗を話したり致しますと、にこにここと聞いて下さったり、破顔一笑なされたりで、至福の一時を過ぎたものでありました。又、厚かましくも、大切な蔵書を幾冊か無理に拝借し、御教示を賜りながらも、不勉強で怠惰な日々を送り、卒論提出締切りの間際まで出すことが出来ず、先生をやきもきさせた事などが懐かしく思い出されます。

高知を去られ、静岡での御生活、昭和女子大学での御活躍の様を耳にするたびに、胸をはずませたものでありました。忙しさにかまけ、お訪ねすることもなく、毎年の賀状の御厚情を戴きながらも、御無沙汰ばかりで御座居ました。突然の訃報に接した時は、本当に信じられず、慚愧の耐え難くただ茫然と立ちすくんだ事をおぼえて居ります。

純道先生はその御芳名の如く、ただひたすら純粹に文学の道、真実の道を生涯にわたって追求され、高潔なお人柄とその学識の深さは、私のような浅学の徒には到底計り知る事は出来ませんが、誰しもがお認めになるところでありましょう。

目を閉じると、在りし日の様々なお姿が、次から次へと浮かんでまいります。多くの事柄が胸中を去来して名残はつきませんが、拙劣な筆にては語り尽すこと叶わず、恥じ入るばかりで御座居ます。

最後に、今は亡き恩師の御交誼に深く感謝するとともに、ご冥福を心からお祈り申しあげます。

(第六回卒業生)

石津先生の講義

篠原義彦

いわゆる授業とか講義とかの名で呼ばれるものにかかずらうようになってから、四十年近くの月日が流れた。それが生業の主要な部分を形成しているのだから、日々の経過の中で、より効率的に、より深奥なるものに、そして、ここが肝心かなめのところであるが、より魅力的なものになっても良さそうなものではあるが、なかなか思いどおりには行かず、日々試行錯誤の積み重ねであり、日暮れて道遠しの感も一入である。

教育実習などで学生の授業を見る機会もあるが、それほどの蓄積もないはずなのに、立て板に水方式の流暢な授業展開に度肝を抜かれたり、か細い声でだれかに哀願するかの如き五十分があっ

たりで、人により、時により千差万別の授業風景が展開される。

小津町での文理学部四年間、先生のいくつかの講義（授業ではない）を拝聴したが、何とも言えない魅力があり、独特の気品さえあった。それは、決して、立て板に水のようなものでもなく、大向うをうならすものでもなかった。どちらかと言えば、抑制のきいた小さな声で、ゆっくりと、そして、正確に展開される講義はみごとであった。人柄からにじみ出る香気に裏打ちされた九十分は、授業ではなく、講義たる名にふさわしい、正真正銘の「講義」であった。

概論も受講したし、平家物語の演習もあったが、出色中の出色は夏目漱石の講義であった。大正五年十二月九日の死に至る五十年の生の軌跡を則天去私にたどり着く階梯としてとらえる論旨は鮮やかであった。折々に見せる漱石の苦悩と矛盾の中に“螺旋状的発展の足跡を位置づけようとする試みには、求道の人としての先生の面目躍如たるものがあった。

無論、漱石その人の評価と位置づけについてはさまざまな観点からの立論があり、則天去私ということば一つを取りあげてみても、近時の矮小化に対しては驚ろきの感さえするが、先生の講義の与えた感動と学問的好奇心については、シャッポを脱がざるをえない。

嫂登世をめぐる江藤淳のエクセントリックな仮説の展開や、雑

誌「世界」による秘められていた漱石日記の紹介など、先生は講義の中で漱石をめぐる最新情報を提示され、学生の知的関心を大いに刺激しておられた。

石津先生の講義はただことではなかった。講義の名にふさわしい、講義の中の講義であった。大学キャンパスの中でもいつしか授業という名の営みが増えていく昨今、先生の講義のなつかしさも一入である。

（第七回卒業生・教育学部教授）

石津先生を偲んで

山下榮

先生が亡くなられてから、早いものでもう一年が経とうとしている。思い起こせば、中世文学や漱石を教わってから四十年を閲したことになる。子母沢寛の小説に「河内山宗俊、42歳の生涯、顧れば往時只茫乎として夢の如し」の名セリフがあるが、あの頃を思うと、往時渺茫の感を禁じ得ない。

定年退職後の最初の夏休み明けに、加古川に住むひと回り年上の長兄から、高知高校第19回文甲・文乙生の文集「南の風」（三冊）が送られてきた。先輩諸氏が50年の歳月を経て、青春の日々を回顧した熱い思いに触れ、感動していた矢先だったので、私も

先生からのご薫陶をお受けした日々や先生の温かいお人柄を偲んでみることにした。

私の手元には、大学時代に学んだ証となるものはあまり残っていない。寄稿のご依頼があったついでに、身辺の整理をしてみるのと、学生時代のものは書籍以外では卒業論文と大学ノート数冊に、渡道の際取り寄せた成績証明書の残り一通だけだった。その内のノート四冊は、一回生から三回生までの三年間石津先生から教わった「国文学特殊講義―漱石研究―」のそれであった。

あまり真面目な学生ではなかったのに、その三年間の特殊講義の成績を先の証明書で照合してみると、いずれも「優」の文字が見える。漱石は高校時代から愛読していたが、先生の歯切れのいい講義には大変魅力があったので熱心に聴講した結果だろうか。それにしても、どんな答案を書いたのか全く記憶がないのは情ない。恐らく先生は、漱石愛好家を一人でも多く増やそうと思われ、激励の意味で好成绩をつけて下さったに違いない。

日頃先生は、ご自身のことは何も話されることはなかったが、東大で久松潜一博士の秘蔵の教え子だったことは有名で、確か私達が四回生の時、その久松先生を集中講義の講師として招聘されたのも、先生とのご縁からだったと伺った。講義内容を冊子にまとめる作業をさせて頂いた頃や仲間の諸兄のことも想起されて大変懐しい思いがする。

最後に奥様のことに触れてみたい。当時奥様は、名門土佐女子中学にお勤めで、先生同様白縁の眼鏡を掛けておられ、朝夕に追手門近くで何度かすれ違った記憶がある。先生ご夫妻はどこか似ていらっしゃる点が多くあった。清楚で地味な服装の奥様を見てみると、「こころ」の静子夫人はこのような人ではないだろうかと思像したものだ。

「こころ」の先生と奥さんのようなロマンスはなかったと思うが、とても仲のおよろしいご夫婦だと感じていた。御著「昭和」のことなど」によれば、昭和女子大に移られてから程なく、静岡の地に家を持たれ百種を数える草木に囲まれてお暮らしになったことが分る。お二人仲良く四季折々の草花を眺めながら、静かに語り合われた日々が長く続いたに違いない。

限られた紙数で語り尽くせないが、先生からお受けしたご恩に對し厚く感謝するとともに、先生のご冥福と奥様の今後のご健勝を心から祈りたい。合掌

(第七回卒業生)

石津先生と卒論

高重哲夫

三十七年も前のことです。当時私は大学の四年生で、卒業論文

の作成に取り組んでいました。テーマの決定、資料集め、資料づくりくらいまでは割合順調に進みましたが、いよいよ書き始めて、夏休みの終わりごろ、はたと行き詰まってどうしても前に進まないのです。でも、まだ日数は充分ある、そのうち何とかなるだろうと高を括くくっているうちに、とうとう冬休みが来てしまいました。

このままでは卒業できない。家が裕福でなかったため、学費は自分で賄うことを条件に大学にやってもらい、奨学金とアルバイトで自活していました。卒業延期となると、奨学金は当然ストップするし、アルバイトもそうそうはしておれません。第一、故郷では両親や弟妹たちが今か今かと私の卒業を待っています。そんなことを考えると、ますます気が焦るばかりです。

そんな時、友人のY君が私の下宿を訪ねてきてくれました。彼はいま卒論を大学へ提出してきたとのこと。「君はどうだ」と聞かれた私は、恥を忍んで「行き詰まって焦っているが、どうにもならないので卒業を延ばそうかと思っている」と答えました。Y君は「とにかくI先生のところへ相談に行こう」と言います。I先生とは、主任教授で私の指導教官です。「今ごろ相談に行ったら叱られるのが落ちだよ」と尻しりこみする私の手を引っ張って、Y君は私をI先生のお宅まで連れて行き、玄関を開けて無理矢理押し込んだのです。

「どうしたんだね、一体」と訝いぶかしがって出て来られたI先生に私はこれまでの一部始終を話しました。「今ごろになって：」と一喝されるものとばかり思い込んでいた私に、先生は「そうですか。一年卒業を延ばして勉強しますか。しかし、お家ではご両親が君の卒業を待っておられるでしょう」と静かな口調で言われるのです。「はい、それは一日千秋の思いで：」と私。その時、先生は「それなら、頑張ってみたらどうですか。まだ三日もあるじゃないですか」と言われたのです。私は思わず「あつ」と声を上げました。それまで私は「もう、三日しかない」とばかり思っただけで、塞ふさぎ込んでいたのです。ところが、先生は「まだ、三日もある」と言われるのです。後で考えると、悲観的、絶望的になっていて私を勇気づけるために言われたのでしようが、それにしても、言い方ひとつで、こんなにも違うのです。内容は同じなのに。

I先生の励ましの言葉と適切なご指導のおかげで、私はそれから三日間、文字通り不眠不休で論文を書き上げ、何とか期限内に提出し、無事卒業できました。そればかりか、I先生から「なかなかいい論文じゃないですか。私の論文に引用させてもらうかしれませんよ」とのお言葉と高い評価をいただきました。

むしろかしい場面に直面したとき、これを飛躍のチャンスととらえるか、それとも、もうおしまいだととらえるかが問題です。

(第八回卒業生)

(香川県立高松東高等学校卒業記念文集「流」平成九年三月発行より抜粋転載)

石津純道先生を偲ぶ

谷内純一

昭和三十五年に高知大学国文学科を卒業して以来石津先生とは年に一度の年賀状を交換するだけであった。先生はいつも「お元氣ですか」と付け加えてくださった。ここ二、三年そのお言葉がなく、お元氣だろうかと案じていた。私は来年退職である。自由になつたら一度は下土狩萩素の先生のご自宅を訪問したいというのが、わたしの秘かな計画だったのだが、それも今では夢となつた。

入学して一般教養の受講科目を選択するときだからともなく、石津先生の講義が素晴らしらしいという情報が入った。私は先生の「島崎藤村」を選んだ。先生の授業はいつも清冽な感動を与えてくれ、次の授業が待ちどおしかった。四十一年前のことではあり、渺茫として具体的なことはほとんど忘却の彼方にあるが、一つだけ紹介させて頂きたい。当時井上靖が新聞紙上に「氷壁」を連載していて、そのシーンを話してくださった。

主人公の魚津が友人の小坂と二人でアルプスに登山したとき、

ザイルが切れて小坂が墜死した。ザイルは岩角では絶対に切れな
いという声があがり。ザイルが切断するか否かの実験が実施され
た。結果はザイルは切れず魚津は窮地にたつことになった。上司
の常磐大作が「おれは君を信じる。おれ一人が信じるだけでは、
君は不足か。」というのだが、そのとき常磐の手が膝の上で震え
ていた…。

あとどう石津先生がコメントされたのかを覚えていない。ただ
人間を信じることの重さを石津先生はおっしゃりたかつたのだと
思う。このエピソードが石津先生の人柄をわずかしか紹介できな
いのは当然で残念だが、ただ具体的な先生のお言葉をすべて忘れ
ても、先生の求めたもの、私たちに窓を開いて示して下さつたも
のは、今も私たちの身中に生きていると思えるのである。後年石
津先生から、ご著書「昭和のことなど」を贈って頂き、拝読した
とき先生の求道的な考え方が思い出されて心洗われる思いをした
ことであった。

石津先生は温容そして至純なるものを求め続けられた。私はそ
の姿に惹かれ、また先生の求めたものに共感できたのである。先
生は私たちといっしょに歩いて下さるお人柄であった。だからふ
たたび先生とはお会いできなくなったことは残念であるが、意外
と私は淋しくはない。なぜなら石津先生は今の私の心の中に生き
ており、静かに思えばいつでもその温顔を髣髴として思い浮べる

ことができるからである。

そういう恩師を持つことができたことは、私たちにとって幸せであった。先生の生前に言うべきであった言葉を今申し上げます。

石津先生ほんとうにありがとうございました。

(第八回卒業生)

恩師逝きけり — 追悼三首

寺内璋仁

麗しき富士見ゆと聴きし駿河路にわが青春の師は逝きたまふ
秋空は夕明かりせり師のもとを訪ね得ずして今ぞ悔しき

西行俊成定家世阿弥漱石と六十路の耳をみ声流るる

(第九回卒業生)

石津純道先生の思い出

寺尾誠眞

私が石津先生に補導教官依頼のお願いに伺ったのは二回生の初めでした。二回生の終り頃に私は体調を崩して大学に休学願いを出した意向を石津先生に申し上げたところ、「君は休学しなけ

ればならぬ程体が悪いようには見えないので許可出来ない。」と云われましたが、クラブ(マンドリン)の事で色々悩んでいた事情を説明したところ、「君は体の病気というよりは精神の方が病んでいるように見受けられるから休学して一時大学から離れる方がい、だろう。」と了解して頂いて一年間休学し、体の調子がよくなったので復学して国文学の勉強のかたわらクラブにも復帰して楽しい学園生活を送っていました。四回生になった時石津先生の一般講義「夏目漱石」を受講しました。先生の講義は素晴らしいものでした。先生の中世文学もよかったです。先生は漱石論は先生の文学思想をそのまま、伝えるものでした。ところで私は四回の終り卒業試験の直前の二月四日節分に結婚する予定となり父の希望により石津先生に結婚式の案内状をさし上げたところ、「君はドイツ語を落して中級の試験を二つも受けねばならないという事態になっているのに結婚式を挙げるとはけしからん。」とお叱りを受けましたが、あく迄も自分の意志は変らないし家庭の事情もあって日取りを変更出来ない旨説明申し上げたところ、「結婚というものは人生にとって非常に大切なものであるが君はそれを真剣に受け止める決意が出来ているか。結婚式を挙げては卒業試験にパスする自信があるか。」と問い正されて自信は無かったけれど、「はいあります。そうでなければこうして案内状迄持参はしません。」と云いますと、「うんそれ程自信があり真剣に受け

止めているのであれば君の結婚式に参加してあげよう。」と承諾して頂き、結婚式では祝詞迄頂いて大変恐縮した事でした。本当に先輩より聞いていた通り面倒見のいい先生で、教え子からも慕われ、又尊敬された先生でした。

石津先生が高知大学を退官されて静岡県の新しいお住いに移られて昭和女子大にお通いになられていた頃私達家族で先生の新家にお寄りした時、当時三才の私の長女が居なくなり、先生も一緒に探して下さったりして、本当に親切で家庭的な先生をお見かけしたのが最後となりました。先生は私にとつては人生の師とも云うべき存在で、年賀状と暑中見舞は毎年欠かさずかわしてききましたが、このたびお亡くなりになられたと聞いた時は心の支えを失ったような衝撃を受けました。しかし先生の教えはいつ迄も私の心に残っています。

先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

平成九年十月六日

(第十二回卒業生)

石津先生の思い出

山本晶子

私の手元に石津先生担当の講義ノートが三冊あります。読み返

してみますと、講義の内容が、先生独特の声調を伴って蘇ってまいります。「今日の学問は、もはや学問のための学問は許されない。」という湯川秀樹博士の言葉が「古典巡歴」のノートの冒頭近くに書きつけられています。この言葉こそまさに先生の講義そのものでした。人生のための学問、人生とは何ぞやに結びつく学問でなければならぬというお考えのもとに講義が展開されました。講義中に触れられた本を読みたいという思いに駆られ、ご本をお借りしに先生のお宅にお伺いしたこともありました。

また講義を離れた先生とのご交誼も懐かしく思い出されます。谷是さんが、口ひげをつけ、先生の物真似をしてみんなを沸かせた忘年会、お宅に外裏さん達とお伺いしてご馳走になったこと、結婚式でお祝辞をいただいたこと、先生の還暦のお祝いの思い出、先生からいただいた奥様の歌集『浜木綿』でも「教へ子が我をも迎へ還暦の夫を祝ふと今宵集へる」、「学生の面影残る誰彼が盃もちて祝ひてくれぬ」と私達のことを歌ってくださっており、あの日の先生のお幸せそうな目元が思い出されます。

先生のたった一人のお子様、純一さんのことは、高校時代K先生が、東大に進まれた俊秀として語られました。奥様は純一さんのことを「もろもろの私心をはなれひとり子をアメリカにやる心かためぬ」、「時を忘れ研究室にこもりある折々を書きて便りお返しぬ」等々と『浜木綿』で歌っていらっしやいます。この純一さ

んが、私の大学時代の同級生で、奥様の教え子でもあられた美智子さんとご結婚なさいました。四人のお子さんに恵まれ、お子さんが成長なされてゆくのを美智子さんから毎年いただく年賀状で拝読し、私人としての石津先生のお幸せに思いを致したことでした。

昭和女子大退職後にいただいた先生の御著書『昭和のことなど』も拝読させていただきました。「富士の眺めをほしいままにすることができぬ」地にお住みになり、折々に先生の心をお動かしたくなった学問、芸術、思想、人、自然などについて独特の視点でお書きになっており、先生の歩まれた一筋の道を感じる事が出来ました。

先生にいただいた最後のお手紙は、私が少し早く教職を退いた時の挨拶状に寄せてのものです。「……これからは両方のお母様の介護と家事に専念なさいます由、それが何よりよろしいかと思われまます。……追白 私共もすつかり年をとり老夫婦になりました。私は八十五、妻は八十四、もうすぐ一つずつ年を加えます。幸いどうにか日常生活は支障なく過ごしています。ありがたいこととです。敬具」

しかし、このお手紙をいただいて一年半後に先生は御逝去なさいました。

先生がこの世にいらっしやらなくても、先生は、私の心の中で

年月を経るごとに、より近しく、懐かしい存在になっていらっしやいます。

先生、安らかにお眠り下さいませ。

(第十二回卒業生)

石津先生のこと

小島哲雄

昭和四十年、十二月十八日、年内最後の講義だったと記憶しています。諄々と中世の文学を説かれていた先生は、久松真一先生の「無」について言及され、その「絶対無」の思想へと展開していかれました。その盛り上がりは「知る人ぞ知る」わけですが、この時の感動は内から溢れてくるものがあり、講義のあと、しばらくジーンとした興奮が残りました。まだ相対世界に翻弄され、右も左も分らない田舎学生にとつて、まさに衝撃でした。

知らないということは恐ろしいことです。僕らは知らないという事も知らないままに文学とか人生とか口にしていたわけで、今考えればまさに恐ろしいことをしていたような気がします。

私も今、教壇に立つ身ですが、授業を通して感動を与えることが如何に困難かを思う時、あの時の体験が石津先生の尊顔とともによみがえってきます。

文学に値するものが何なのか、わからないままに過ごしていた前年の「概論」で松浦一先生の「背後に自己の死を背負っていない小説を文学とは呼ばない。」という説を紹介され、眼から鱗が落ちる思いをしたことも忘れられません。

一般教育では先生の「漱石とその周囲」を取りましたが、「三四郎」から「門」に至る漱石の精神の浄化過程が手にとるようにわかり、文学というものの味わい方をじっくりと教えて頂いたような気がします。

どの講義にも誠実な先生の人柄がこもり、おろそかにできない重みを感じ取れ、私は座席後方でしゃべったり、遅れてきたりする他学科の学生たちにもやみと腹を立てたことを覚えていきます。先生の学蹟は特に倫理との結びつきを重視され、個の幸福と他の幸福が一致する生き方をどこまでも厳格に真摯に求めつつづけておられるように感じました。

当時、学科長をなさっていたこともあり、同学の中には近寄り難い威厳を口にするものもありましたが、私自身は講義を通して伝わってくる先生の人柄、学問に対するひたむきさを感じ取ること十分満ち足り、個人的にその警咳に触れるなど恐れ多いことでした。

演習「徒然草」のレポートはシビアでしたが、「概論」で教わった「真」「善」「美」「聖」の観点を座標軸に整理してみました。

た。

ある時、何かの用で、研究室に伺った折、ふいに「君、あのレポートはよかったよ」と言われ、はじめ、とまどい、あとでじっくり喜びがこみ上げてきたことを覚えていきます。

御著書『中世の文学と芸道』にもしばしばあらわれる「道」や「無」「禅機」などといった言葉に触発され、そういった思想の淵源を辿ってみたい気持ちから、卒論を「老子」に決めたのは、冒頭の十二月十八日の講義の後あとでした。

少しずつ資料を集め、四回の夏ごろから徐々に取り組みましたが遅々として進みません。他学部の上級生でニーチェを熟読する方がいて、少なからず影響を受け、シヨールペンハウエル、ヤスパース、キェルケゴールなどをかじっていました。老子の「無」と実存哲学に於ける「無」とを対比しながら進めてみようと思い、拙い文を書き上げたのです。

卒業を控えた或る日、友人と、先生の小津の官舎を訪ねました。話が卒論に及んだ時、先生は「君の論文は新しいスタイルの論文だね」といつて評価して下さいました。苦肉の論文を叩かれず、ホッとすると同時に嬉しさがこみ上げ有頂天になったのを昨日のように覚えていきます。

今にして思えば、すべての学思は石津先生に収斂していくのです。「ありがとうございます」という言葉以外言葉がありません。

ん。
訃報に接し、大きな驚きと悲しみを禁じ得ませんでした。あらためて「ありがとうございました」と頭を下げ、先生の御冥福を祈るばかりなのです。

(第十五回卒業生・土佐高校教諭)

沖繩から

大城順子(旧姓金城)

米國統治下にあつた沖繩から、國費留學生として高知へやつて来たのは、昭和四十二年の春であつた。もう遙か三十年も昔のこととて、記憶も薄れてしまつたが、国文科の主任教授でいらしたの
だろうか、私が初めにお会いしたのは、石津先生であつた。

「本學は、初めて沖繩からの国文学専攻の學生をお引き受けしました。あなたは日本語はどうですか。講義は十分にきけますか。」

私は一瞬、返事に窮した。大学の講義なるものは、それほど高度で難解なものなのだろうか。私は大へんな所へ来たのだろうか……。先生は続けておっしゃつた。「いや、実は、南米の留學生が昨年来たのですが、講義がきけなくてねえ……。」 私はうなづき、多分大丈夫だと答えた。

大學時代、石津先生の研究室へは、ほとんど伺つたことがない。あの頃は若すぎて、石津先生は別世界の存在であつた。卒業して、一度ハガキを差し上げたきりである。

二回生の時、たまたまバス停でお会いした。声をかけられて返事はしたが、敬語が出ずにしまつたと思ひ、気まずく立ちつくした。先生も黙つておられたが、「口のきき方も知らぬ小娘」と思われたらうと、二重のシヨックであつた。石津先生は、一目も二目もおいた尊敬すべき対象であり、近寄り難い存在で、敬語を使わねばならぬと思つていた。見るからに聖人君子然として、「孔子さま」はあんな感じかもしれぬと思つていた。だが、お笑いになると、何ともいえぬ好々爺の笑顔で、漫画サザエさんの波平 はそっくりで、テレビを見る度に思ひ出された。

講義は、非常にまじめに一生懸命になされる真剣な姿が脳裏に焼き付いている。或る男子學生が「先生の恋愛の話をしてほしい。奥さんとのなれそめは？」などと要望したことがあつた。先生は、真つ赤な顔になつて、しばらく黙つて、「いや、私は……そういうことはとても……まだまだまだ悟りきつていないので云々。」とごまかされ、とうとう石津先生の恋の話は聞けなかつた。あの頃ずい分とお年のようにみえたけれど、よく考えるとまだ五十年代だつたのだから。

三・四回生の大學紛争の頃の講義でおっしゃられたことは、今

もずっと心の中に残っている。

「大学において、講義だけは何ものにもかえられぬ純粹ですばらしいもの。人生やこのこの社会の中で、講義だけは純粹無垢な時間・空間であるから大切にしたい。私は講義に全力を注いでいる……。」

私は教職について、常にこの言葉を思いかえず。授業は教員の命。全力投球せねばならぬ。手抜きをしてはならない。このことは、まぎれもなく、石津先生の真摯な態度に教えられたことである。

愚かな教え子は、敬して遠ざかった過去を悔み、失ったもの大きさと、とり戻せぬ時間を認識しつつ、慚愧の思いで、訃報を聞きました。遙か南の沖繩より、石津先生のご冥福を祈り、ただ合掌するのみです。

(第十九回卒業生)

石津先生の思い出

寺柚雅人

私が入学したのは昭和四十三年で、今からおよそ三十年も前のことになる。

石津純道先生は当時国文の主任であられ、国文学専攻の私達は

先生方に温かく迎え入れていただいた。

だが、それは七〇年安保の喧騒がだんだんと増していく時代であった。

授業は欠席者が多くなり、特に英語や独語では国文の学生は全減に近いこともあった。国文で何か会合があるのですかと担当の先生が質問されることも一再ではなかった。因みに、これは伝聞である。私も欠席の多い学生の一人であった。

あるいはそうした喧騒の余波であったか、私は突然退学を思い立ち、今はもう故人となられた指導教官の永田哲夫先生に申し出たことがあった。永田先生が石津先生の研究室に電話され、ややつて石津先生の少し高いお声が「本人の決心が固いようなら……。」と受話器から漏れるのを私は畏まって聞いていた。

文学科研究棟を後にした私は、いったんは郷里に帰省したのだが、一週間の後何故かまた高知に舞い戻っていた。こうして私は再び石津先生に、今度は退学せぬことを許されることとなった。脆い決心であった。

こういう私をはじめとする不良学生を寛大に受け容れ、あるべき方向をしめしてくださいだったのが、石津先生のお人柄、ご人格であった。当時のことはつねに慈愛に満ちた先生の笑顔とともに思い出される。

先生はいつも愛用の帽子（ハット）を被られ、講義にはノート

や資料などの入った風呂敷包みを小脇に抱えてお見えになった。仲間内では先生のことを「波平ちゃん」と愛称で呼ぶ失礼な輩もいたが、そこにもやはり敬愛の念が通っていた。

専門に入ってはじめて聴講することを得た先生のご講義は謡曲に関するものであった。自慢話になるが、この期末試験の私の答案は意外にも先生にお誉めいただくこととなった。上級生の多いクラスで単位取得にさえ不安を抱いていたから喜びも一入であったのだが、何より、先生がこの答案の内容について丁寧な解説を交えてお話しくださったことが強く印象に残っている。大学の先生が学生の答案ごときを詳細に見てくださっていることに驚いたのである。

その後、私自身も教員になり、うずたかい机上の答案にも対峙することとなったが、そんなとき、この時の先生のご姿勢がいつも脳裏をよぎる。

先生の引率された万葉旅行にも参加させていただいた。昭和四十五年十一月のことである。奈良の日吉館に宿泊した折りのこと、先生は「一緒に入りましょう」と我々を湯に誘ってくださった。三回生となっていた私達数人の男子学生は遠慮もなく一緒にさせていただき、背中を流し合い、赤く上気されたお顔の先生から親しくお話をうかがうことができたのであった。

実際は、湯船は狭い桶で、浴室も何人ものむくつけき男子学生

が入るには決して適切な広さではなかった。が、今にして思えば、大げさかもしれないが、それはこの上もなく適切な師弟の交流の場であったと思う。

どれもこれも私には忘れがたい思い出であり、貴重な先生のお教えであった。

先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(第二十一回卒業生・尾道短期大学)

石津教授を憶う

松村誠一

多年国文学専攻主任を勤め、最後は文理学部長として、学部を代表する重職につかれ、功成り名遂げてめでたく定年退職なさった石津教授は、まことに教育者として研究者として、またとない幸せな一生を終えられたお方であるというべきである。しかし、その先生にもまた、人知れぬ多くの苦悩があったことを、長く側にあった者は忘れることができない。

先生が高知の地を踏まれたのは、旧制高知高等学校教授に任官された昭和二十一年のことであったが、そこに待っていたのは、戦災で焼け残った南溟寮五棟のみの廃墟であった。まず校舎の復旧が急務で、教官一同差し当ってバラックの建設に全力をあげて

いた。しかし、戦争で最も大きな打撃を受けた被害者は生徒である。かれらの傷ついた心に教育者としての愛の手を差し延べることは一日もおろそかにできないことであった。温厚な人格を認められた先生は、曾我部生徒課長に懇望されて生徒課勤務となり、生徒の良き相談相手として、力を尽くされた。

しかし、落ち着く間もなく学制改革の荒波が押し寄せて来た。新制高知大学文学部国文学専攻の立案計画の責任者として、まず教官予定者の選考から始められた。高等学校には先生と私の二名がいるのみである。あと二名は必要で、その人選には苦労なされた。幸いにも高知高等学校から東大国文を出られた、旧知の片岡一義先生・小関清明先生が師範学校に在職されていたので、早速内諾を得て人事は円滑に運び、大学設置申請も無事認可され、和やかな雰囲気の中で発足した。

文学部は新制大学移行の際に、旧高校の教官定員の二割を、地元の要望で母体もなく新設した農学部のために供出した。これが思いもかけない苦悩を、石津教授に押しつけることになった。教授・助教など職種別定員は極めて窮屈で、フランス語教官を採用するため助教定員を一名農学部から借りていた。それを返してほしいとの申し出があつて、文学部は何か手を打たなければならぬ。片岡助教が、病気のため言語の速度がすこし遅くなつていたので取り上げて、休職にせよと教授会から石津教授

に要求された。講義に差し支えるほどのことはなく、学生からもなんら不満の声もあがつていない。前学部長の不手際の後始末にこんな残酷なことを同僚に申し渡すことができようか。石津教授の苦渋にみちたお顔を今も忘れぬ。相談を受けた私にも名案は無い。結局他に方法もなく教授会の議に従つて、学部全体の平安を保つ外はなかった。欠員ができた次第最優先的に復職させるという保証を取り付けたうえで、石津教授はこの辛い役目を果たされたのであつた。天の助けが半年ばかりで助教の転出があり、確約にしたがつて復職が実現した時の、安堵のお顔もまた忘れることができない。

追悼

東辻保和

石津先生には、旧の高知駅で初めてお目にかかりました。昭和四二年の夏休みのことでした。その年の十月から高知大学にお世話になることが決まっていたからです。先生は駅頭に、半紙に墨痕鮮やかに「東辻様」とお書きになったのを掲げて私を迎えて下さいました。その印象は大変強く、今もくつきりと心に焼き付けられております。

その日、先生の研究室では、小関先生とも初めてお目にかかり

ました。当時の研究室棟はまだ木造の落ち着いた建物でした。石津先生の研究室は一階の一番奥にありました。壁には夏目漱石の筆になる「則天去私」の篇幅が掛けられ、先生はそれに対坐するように木作りの大きな机を置いていらっしやいました。先生の御専門は中世文学でしたが、漱石の文学についても御造詣が深く、一般教育では、ずっと「漱石論」を続けていらっしやり、学生の評判も高いものでありました。

私は先生が昭和四八年の春に定年で御退官になるまで、公私共に大変お世話になり、教えていただきました。先生は旧制の高知高校の教授として着任されて以来、一貫してその精神風土を受け継いで来られたように思われました。先生にとって恩師の久松潜一博士は終生思慕の対象であられたようであり、何かのお話の折には久松博士のお名前が出るのが常でした。近時の研究者がとかくあたふたと論文の製造機械のようにならざるを得ないのに対して、先生の風格あるお姿からは、一種近寄りたがいのものを感じたことでした。

私は幸いに珍しい体験をさせて頂きました。毎年のように、文理学部と教育学部の国語国文の教師が懇親の夕べを持ちましたが、円行寺温泉でのこと、石津先生と私とが温泉につかりました。他の先生方はどうであったかしかとはいませんが、とにかく石津先生と同じ浴槽に入ったことは間違いありません。そ

のときに石津先生が「これは良い思い出になるよ」とおっしゃいましたが、私にとってもその通りになりました。

この辺で駄文を弄するのは止めようと思いますが、私にとってどうしても忘れ難いことを最後に書かせて頂きます。近代文学専攻の故永田哲夫教授は高知大学の第一回卒業生であり、石津先生には後事を託するに足る弟子として期待をかけていらっしやいました。しかるに天運つたなく昭和五八年一二月に天折されたことは、どんなにかお寂しかったこととお察し申し上げておりました。永田教授は私と一歳違いということもあり、親密にして頂いた間柄でした。その後余り間を置かず、私が転任致すことになりましたが、石津先生からのお便りに「君は定年まで高知にいてくれるものと思っていた」との言葉が、今も胸に重くとどまっております。先生のお机は私が使わせて頂いておりましたが、その後どうなっているのでしょうか。

故 石津純道先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(比治山大学教授)

石津純道先生を偲ぶ

岡林清水

広島大学のころ、わたしは『平家物語』のレポートを書こう

として、久松潜一・石津純道共著の『平家物語』（昭和十二年九月二十日発行・楽浪書院）を読み、その堅実な研究態度に教えられること多大であった。この書は、共著のかたちをとった、石津先生の最初の単行本であったが、その次に、昭和三十六年六月十五日至文堂から出版された『中世の文学と芸道』（石津純道著）は、昭和十二年以来“折にふれ縁にしたがって”発表してこられた中世の文学と芸道とに関する十数編の論文集であった。

わたしは石津先生からのご指名で、高知新聞にその書評を載せることになり、浅学の身での論評を恥じつつも、この書の、重厚であり、包容性のあることを説いたことであった。著者が論中でしばしば使われている「…かと思うのである」という結びにも、うかがわれるように、この書は、慎重のなかから生まれてくる断定となって具体化しているが、これはそのまま石津先生のお人柄であった。

大学を卒業して北海道第一師範学校（現、北海道教育大学）へ就職したわたしは、もしわが国の敗戦という変革期がなければ、故郷の高知へ帰り、ながくとどまることもなかったかと思われるので、中世の戦記文学の悲劇性から出発した石津先生との、高知大学での出あい、昭和二十年の敗戦の悲劇がもたらしたものと見えるかもしれない。

高知大学教育学部につとめているわたしを、高知大学文理学部

の近代文学の講義、あるいは高知女子大学を借りての公開講座、そして開館当初の高知市立中央公民館での、十五回連続の文学講座「戦後文学の展開」に推薦して下さったのも石津先生であった。おかげで、高知大学文理学部・人文学部の学生とも親しくなり、広く高知市民とのつながりもでき、高知県文学への関心も深くなっていった。

先生は、わたしに何かご依頼下さるときには、電話を使わず、必ずじきじき拙宅におこしになった。喪服に通用できるような黒い服、黒い口髭であらわれたので、わたしの家の小さい子どもは、“こわい先生が来た”と、そつと妻に告げたことであった。

水戸特有の、平板式のアクセントで静かに話され、やさしいなかに、ゆるがし難い威厳を保たれ、慎重なようでも、決断力もすぐれ、行動性に富み、社交性も十分に持って居られた石津先生であったが、今やなし。富士の見える東海の地に逝きし行人をおもうや切。

石津先生の遺言

渡邊輝道

昭和五六年の高知大学国語国文学会は創立三〇周年を迎えることになったので、学会生みの親である石津先生をお迎えしての記

念大会にしようということになった。当時の国文学教室の教官六名の中で先生を存じ上げているのは東辻、永田両教授のみであった。先生を深く敬愛しておられたお二人からはいろいろの機会に、先生がその風貌をはじめとして挙措動作の品格、学生指導の情熱等々、まさに大学教授の典型でいらつしやることを聞かされていたので、面識のない四名はいささか緊張してお迎えすることになった。お会いしての印象は話から想像していたのと違うところなく、離高されるまで緊張を解くことができなかった。その折の教官で今も在職しているのは私一人だけである。

学会での講演題は「精神的文芸学の一つの試み」であった。お話の内容の子細は長い時間の間に流されてしまったが、七〇歳を越えて衰えることのない学問への情熱を、静かな口調で話されるのだが、聞くものを圧倒する力があったことが印象として今も強く残っている。当時の学会には卒業生の出席は数名というのが常態であったが、石津先生の御来高ということで卒業生の多くの参加があり、講演会の後の得月楼での懇親会も近年にない盛況であった。卒業後はじめての学会参加であるという方も多く、在学中先生に大変お世話になったという卒業生の声をあちこちで聞かされ、また石津先生の伝説が増えることになった。その折、先生から「これからの国語国文学会をよろしく」と声をかけていただいたのが現実になろうとは思ひもかけなかった、私は着年三年目

のペイペイの助教教授であった。私が先生にお会いしたのはその時一度だけだが、国語国文学会というといつても石津先生の一言が思ひ出される。

時移り事去り、今大学は改革の風のなかにあつて、文学科は人文学科に、さらに平成一〇年度からは、人文学科は新しく二学科にと編成替えが行われ、旧国文教室スタッフは三つに分かれて配属になる。平成四年の改組の時、松村先生は「伝統ある国文教室の灯を消すとはなにごとか」とおっしゃっていると人伝てに聞いたが、今度はどういわれることかと改組を進めた当事者として身の縮む思いをしているのだが、先日の旧国文教室の会議でこれらの自分たちの集まる基盤は国語国文学会だけになったことを改めて確認したことであった。昭和二五年の学会発足時には会員、教官七名、学生三名であつたと記録にある。それが今や教官一五名、卒業生八〇〇名弱の会員を擁するまでに育つたのである。石津先生をはじめとする諸先輩の残されたこの遺産をどう継承し、さらなる発展を期すか、事務局を構成するわれわれの責任は重い。私にとつてはあの時のおこぼれが石津先生の遺言になった。

(高知大学国語国文学会会長・人文学部長)